

# 「柿右衛門」と有田・南川原窯

高島裕之

## 1. はじめに

有田は、磁器の町である。17世紀前半に原料採掘地の泉山が発見され、日本でも磁器の生産が本格的に行なわれるようになった。そして時代の流行や用途に合わせて、「古九谷」、「柿右衛門」、「古伊万里」、「鍋島」などと呼ばれる様々な製品スタイルがみられるようになった。このスタイルの名前が付いた当初は、生産場所差と捉えられていたが、その後「鍋島」以外の製品については、生産時期に起因することが明らかになってきた。そして、現在では各々が時間軸に一列に並ぶ形ではなく、研究が進む中で修正が行なわれている(村上伸之 2008. p. 217-218)。その中でいわゆる「柿右衛門」は、ヨーロッパでは各地に伝世していて、近年イギリス・ドイツ・オランダで資料の集成も行なわれた(柿右衛門様式磁器調査委員会 2009)。この報告書の中では、特に有田の柿右衛門窯と関連があると判断された製品に関して、「南川原山」と生産地が表記されている。それらは大橋康二氏<sup>(注1)</sup>によって材料、成形、装飾、窯詰め法などから総合的に判断されている。

「南川原山」は佐賀県有田町南西部の地名であり、酒井田柿右衛門家が窯焼きとして活動した窯場である<sup>(注2)</sup>(Fig. 1)。この南川原地区では、発掘調査も進展しており、自らは過去にこれらの窯跡の出土陶片1点1点を観察し、その概要をまとめた(高島裕之 2009)。今回はその成果に基づき、いわゆる「柿右衛門」の焼成された「南川原」という窯場とその陶磁器生産について述べ、研究者の中で枠組みの幅が異なる「柿右衛門様式」の製品について、その成立の背景を考察していく。

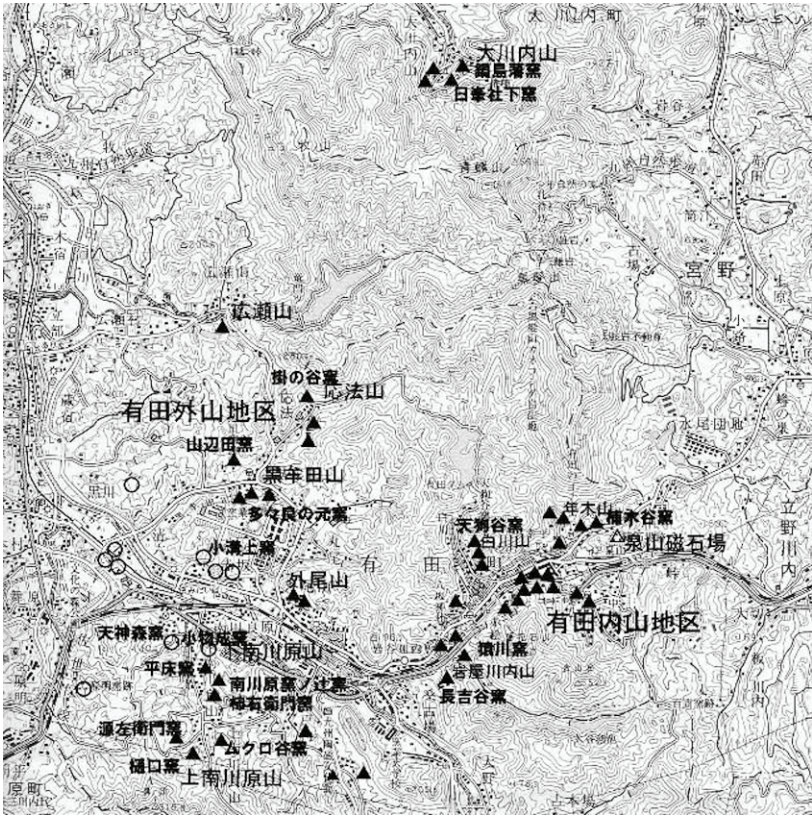


Fig.1 有田の窯跡（▲は窯跡、○は寛永14年の窯場整理・統合以前の初期の窯場）

## 2. 南川原地区の窯跡

「柿右衛門」は、「赤絵」創始の記録の残る酒井田柿右衛門家と深く関わる色絵のスタイルとして認識されていて、『角川日本陶磁大辞典』には、「柿右衛門様式」という項目の冒頭に「酒井田柿右衛門の作、あるいはその家系の作と考えられていた伊万里焼色絵磁器の作風の分類名称。17世紀後半の西欧向け輸出用色絵磁器をその典型とする。」とある（矢部良明監修 2002. p. 267-268）。酒井田柿右衛門家は「南川原山」の「窯焼き」として、江

江戸時代の記録にみられ、現在も南川原で窯業を営んでいる。「窯焼き」というのは原料の購入から焼成に至るまで行なう事業主であり、その証として「窯焼き名代札」の交付を受けた。有田で使われる登り窯は、何室も部屋を連ねた連房式であり、焼成

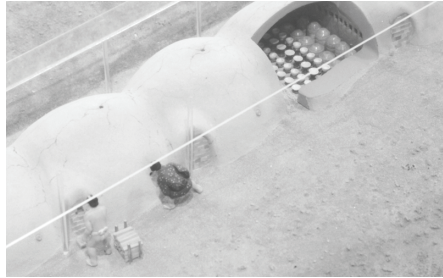


Fig. 2 登り窯の模型

室ごとに持ち主の違う共同窯であった (Fig. 2)。登り窯の焼成室は、「窯焼き名代札」を持つ者が所有できるのである。『酒井田柿右衛門家文書』の記録では、文政 12(1829)年には 14 部屋を 6 人の「窯焼き」で所有したことが解っている。発掘調査では、登り窯で作られた製品の全てを明らかにすることは困難である。共同で使用された窯 (Fig. 3-1) の一部を調査するのであって、酒井田柿右衛門家と関連する窯跡の発掘調査を行なっても、出土する陶片のすべてがその陶工集団と関わる遺物として、位置付けることはできない。

また有田では江戸時代から現在まで同じ所に町が展開されているため、工房跡も含めた生産の全工程を、発掘調査の中で明らかにすることは限定されてくる。その中で山の斜面に設けられた登り窯が、生産の遺跡として多く調査された。窯跡で出土する遺物は、「陶磁器」と製品を焼くための「窯道具」に分けられるが、ここで出土する陶磁器は、市場には出回らなかった焼成失敗品である。窯の中に残された、または登り窯の傍らの谷に設けられた物原（ものほら） (Fig. 3-2) に廃棄された陶磁器であり、各々は割れ、熱によって曲がり、文様の描きかけで捨てられた破片もある。

南川原地区には、上南川原山地区と下南川原山地区と 2 つの窯場がある。まず有田でも初期の窯である天神森窯跡や小物成窯跡などが、17 世紀の初めから操業する。それらは寛永 14(1637)年の有田の窯場整理・統合によって、一時期無くなるが、17 世紀中頃には再び樋口窯跡や南川原窯ノ辻窯跡が操業し、各々「上南川原登」、「下南川原登」として近代まで窯場が続く。17 世紀後半～18 世紀前半の中では、3 基以上の窯が稼働している。すなわち 17 世紀後半には下南川原山地区では、南川原窯ノ辻窯、柿右衛門窯、平床窯が併



Fig. 3-1 南川原窯ノ辻窯地表に残る窯壁



Fig. 3-2 南川原窯ノ辻窯物原の堆積  
(駒澤大学調査)

行して操業するし、17世紀末から18世紀前半には、上南川原山地区で樋口窯とムクロ谷窯が併行して操業する。そして18世紀後半には、上南川原山と下南川原山に各々樋口窯と南川原窯ノ辻窯の1つずつの窯の操業となり、17世紀後半に比べると窯場としては規模が縮小する。

登り窯は有田磁器の工程の中の「本焼き」に使われる窯であり、「上絵付け」は「本焼き」の後に登り窯と別の場所で行なうことから、窯跡では色絵の破片は、ほとんど確認できない。つまり窯跡の発掘調査資料からは、ヨーロッパに伝世するいわゆる「柿右衛門」の色絵製品の実像は、つかみにくいといえる。しかし色絵の素地は確認されていて、乳白手（にごしで）といわれる「柿右衛門様式」の素地となる白磁<sup>(註3)</sup>(Fig. 4)が、下南川原山の南川原窯ノ辻窯、柿右衛門窯などで確認できる。



Fig. 4 乳白手白磁菊枝文皿  
(南川原窯ノ辻窯物原 B19 層出土)

### 3. 南川原地区の出土製品の変遷

南川原地区の出土製品の変遷については、次のようにまとめられる。

物原で出土する陶磁器の器形は様々であり、碗、皿、鉢、瓶、向付(猪口)、蓋、香炉などがある。



Fig. 5-1 染付寿字文碗  
(南川原窯ノ辻窯物原 C10 層出土)



Fig. 5-2 鉄釉陶器碗  
(樋口 4号窯物原出土)

る。種類は染付、白磁、青磁、鉄釉、灰釉などがある。色絵は数片確認されているが、本焼きの工程とは異なるため、上絵付けは別の場所で行なわれ、物原で廃棄された例である。

『承応三(1653)年万御小物成方算用帳』には、「有田皿屋」のうちの「南川原山」と「南川原皿屋」と2つの「南川原」の記載がみられる。各々染付碗(Fig. 5-1)を製品の主体とした南川原窯ノ辻窯、鉄釉陶器碗(Fig. 5-2)を製品の主体とした樋口窯が該当すると推測される。南川原窯ノ辻窯は、製品の施文の類似性から 1650 年代に有田の内山地区の陶工集団の手によって始められたと考えられる。<sup>(注4)</sup>

いっぽう酒井田柿右衛門家を中心とする陶工集団の足取りも発掘調査の中で明らかにされている。調査が進む以前は、酒井田柿右衛門家は南川原に定住していたと断定され、上絵付創始の記録「覚」に登場する「年木山」は、柿右衛門窯のある斜面と想定されてきた。しかし、「年木山」銘ハマが年木山(泉山)の年木谷 3 号窯跡で出土し(Fig. 6)、同じく年木山(泉山)地区の楠木谷窯の最終製品と柿右衛門窯の最

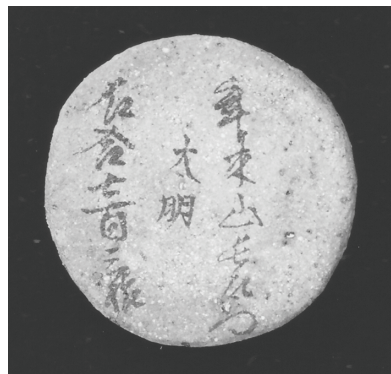


Fig. 6 「年木山」銘ハマ(窯道具)  
(年木谷 3号窯跡焼成室床下出土)

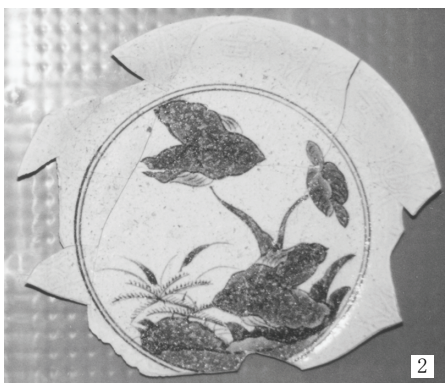


Fig. 7-1・2 染付芋葉文皿 (1-楠木谷窯表採・2-柿右衛門窯3次調査AT-2遺物取上げ10層)

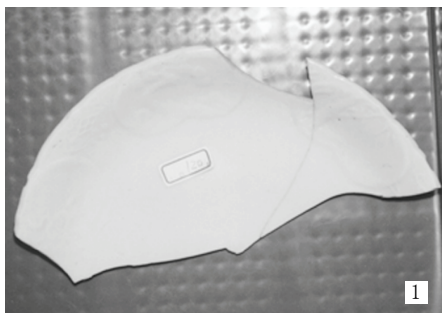


Fig. 8-1・2 白磁松竹梅鶴亀文輪花皿  
(1-柿右衛門窯2次調査物原遺物取上げ21層・2-南川原窯ノ辻窯物原7層)

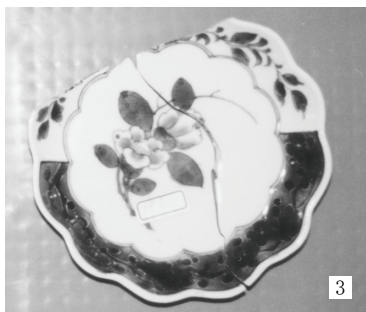


Fig. 8-3・4 染付椿枝文輪花皿  
(3-柿右衛門窯3次調査物原遺物取上げ7層・4-南川原窯ノ辻窯物原C6層)

初の製品に共通する例があることが解った(Fig. 7-1・2)。このことから酒井田柿右衛門家を中心とする陶工集団は、1650年代後半に年木山(泉山)から南川原山へ移ったことが解った。

この陶工集団の移動に呼応するように、南川原窯ノ辻窯では、製品の主体が染付碗から型打ち成形を伴う上質の皿に変化する。発掘調査の試掘溝内という限定条件があるが、南川原窯ノ辻窯と柿右衛門窯では、物原の中での製品の変化に共通する部分があり、同種または同じ品質の製品がみられるようになる(Fig. 8-1-4)。同じ窯場内で併行して操業する2つの窯の中で、同種または同品質の製品の出土することからは、次のようなことが推測できる。すなわち同じ陶工集団が併行して操業する2つの窯に、それぞれ窯室を持っていた可能性である。従来あまり指摘されてこなかったが、同じ陶工集団が窯の火入れの日程を変えて、別の窯の各窯室で陶磁器焼成を行なうことで、海外輸出も含めた多大な需要量に答えていた可能性も想定できると思う。

南川原地区で生産された輸出用の製品では、東南アジアなどに運ばれ、肥前一带で作られた染付雲竜文碗(Fig. 9-1)も最初みられるが、製品の主体が皿である柿右衛門窯では染付芙蓉手皿(Fig. 9-2)が大量に出土している。また17世紀後半の中で海外輸出に向けて、南川原地区では付加価値を加える形で、採算を度外視した上質な柿右衛門様式の色絵磁器の生産を行なった。「柿右衛門」というスタイルが完成されたのは、現在では1670年代であると考えられている。



Fig. 9-1 染付雲竜文碗  
(南川原窯ノ辻窯物原 C6 層出土)



Fig. 9-2 染付芙蓉手皿  
(柿右衛門窯2次調査物原遺物取上げ7層出土)

1670年代の物原層では、「柿右衛門」の素地にもなる乳白手白磁と共に、下南川原山地区では高台無釉の鉄釉陶器が併焼されている。上南川原山地区では1640年代から続くこの陶器の併焼は、磁器専業である有田の他の窯場には確認できないことから、南川原地区の特徴といえる。この陶器の生産は乳白手素地と共にみられなくなる。17世紀第4四半期に下南川原山地区では柿右衛門窯の廃窯、上南川原山地区ではムクロ谷窯の開窯があり、窯場の中で再編が行なわれた事実を物語っている。南川原の陶工が移動した長崎の現川<sup>うつつがわ</sup>焼の創始も、その再編の中で生まれた現象といえよう。さらに有田全体では、18世紀に入ると肥前磁器の海外輸出時代が終焉を向かえ、国内市場への比重が高まるが、南川原地区では新たな需要層の獲得のための、価格低減の工夫が必要となった。

#### 4. 「柿右衛門」というスタイル

日本における「柿右衛門」というスタイルの枠組みは、研究者によって様々である。一般的には乳白手素地に余白の多い構図というような漠然とした色絵のスタイルとして認識されてきた。

大系的な「柿右衛門」研究の嚆矢としては、第二次世界大戦前的大河内正敏『柿右衛門と色鍋島』がある。「柿右衛門様式」という言葉は、1950年代の柿右衛門調査委員会による、文書や窯跡を含めた総合調査が行なわれた頃から使われてきた(柿右衛門調査委員会 1957)。そして輸出磁器としての「柿右衛門」が注目を集め、日本の磁器が東南アジア諸国やヨーロッパ各地から買い戻され、工芸品である陶磁器は一個人が作り上げるのではなく、多くの陶工の手を経ていたと理解された。そして「柿右衛門様式の色絵磁器」というように、有田皿山で焼造された色絵磁器の様式として考えられるようになった(西田宏子 1977. p. 47)。

東京国立博物館で1979年に開かれた「色絵磁器柿右衛門様式の展開」展では「伝統的に酒井田柿右衛門の名称がつけられてきた経過からそのまま名前を残し、一群の様式美をさすものとして一括して「柿右衛門様式」と称すること」にし、「柿右衛門様式は、一貫して中国様式を母型においた色絵磁器」



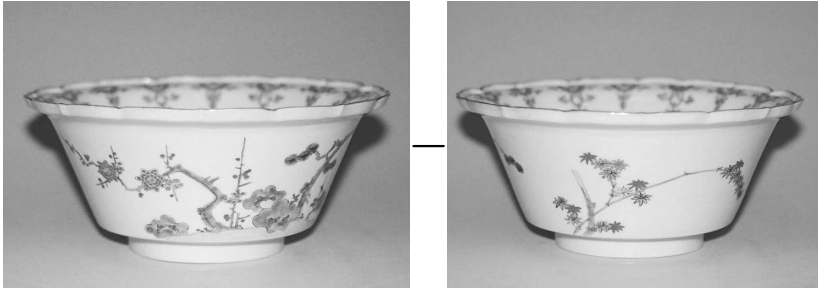


Fig. 10 典型的な柿右衛門様式：色絵松竹梅文輪花鉢

と位置づける見方もあった(矢部良明 2000. p. 52, p. 55)。この中国からの色絵の系譜に関しては、いわゆる「南京赤絵」に類する技術がベースとなったことも指摘されている(村上伸之<sup>(注6)</sup> 2008. p. 230)。

いっぽう「柿右衛門様式」の様相をもつ染付磁器について、「藍柿右衛門様式」という言葉も一部で用いられた。共に使われた「藍九谷様式」との相違については「素焼きの開発という有田での技術の進歩がもたらした必然的な結果生じたもの」とする意見があるが(山下朔郎 1983. p. 16)、素焼きの有無に関しては慎重な意見もある(鈴田由紀夫 1990. p. 104-105)。さらに「柿右衛門様式」については、赤絵町遺跡の発掘成果などから有田の中での時代様式としての用法もみられるようになり、佐賀県立九州陶磁文化館では「延宝様式」などと前後の時代の日本の年号も合わせた言葉も用いられた(佐賀県立九州陶磁文化館 1997)。

この広がりすぎた「柿右衛門様式」の解釈について、1999年には佐賀県立九州陶磁文化館『柿右衛門様式総合調査事業報告書』が発刊され、「柿右衛門様式という個人名による様式を使用するとすれば、限りなく酒井田家が生産に関わった可能性の高い製品、中でも代表的な日本の陶磁器としての特徴を示すことが可能であり、1670～80年代の土型による型打ち成形を多用した、成形の巧みな乳白色素地を用いた、優れた描写力をもつ上手の色絵作品をさすべきである」という提案が行なわれた(佐賀県立九州陶磁文化館 1999-1. p. 280)。そして具体的に展示によって、「典型的な柿右衛門様式」という区分が図録で示された(佐賀県立九州陶磁文化館 1999-2. p. 8) (Fig. 10)。

その典型作品の条件として、次の5つを挙げている。

- I. 色絵であり、濁手素地であること(染付を使っていないこと)
- II. 型打成形を主とした精巧な成形の素地
- III. 余白の多い非対称の構図
- IV. 赤・青・緑・黄+金・紫の上絵であり、細密な線描で絵付けされていること
- V. 柿右衛門窯跡及び南川原窯ノ辻窯跡で陶片が発見され、酒井田家が生産に関わった可能性の高いもの

その後九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センターの研究プロジェクトによっても研究が進められ、その中では柿右衛門窯が作り出した「柿右衛門様式」の色絵素地の特徴について、次のようにまとめられている。

1. 傷やゆがみのない完璧な素地であること。普通サヤに入れて窯詰め焼成する。
2. ハリ支えの溶着痕は小さく、数も少ない。
3. 普通の有田民窯の製品より高台が高く、畳付にいたるまで鍋島焼に匹敵する丁寧な成形で作られる。
4. 口は平らに鋭くカットし、口錆を施すものが多い。
5. 典型的なものは、釉の青み(鉄分)を徹底的に取り除き、その上、釉を薄くかけた乳白手(濁手)素地を用いる。そのため乳白手素地には一切染付は入らない。

そしてこの素地に繊細な色絵を施したものを「典型的柿右衛門様式」として位置づけ、柿右衛門窯以外の他の窯で作られた例も含む「広義柿右衛門様式」と区別された(大橋康二 2008. pp. 14-15)。

これは柿右衛門窯、酒井田家の製品を厳密に区別しようという指針の中での分類であるが、実際に窯跡での出土例と比較すると問題点が提起できる。例えば柿右衛門窯跡3次調査B窯7・8室北側物原横断トレンチ遺物取上げ3

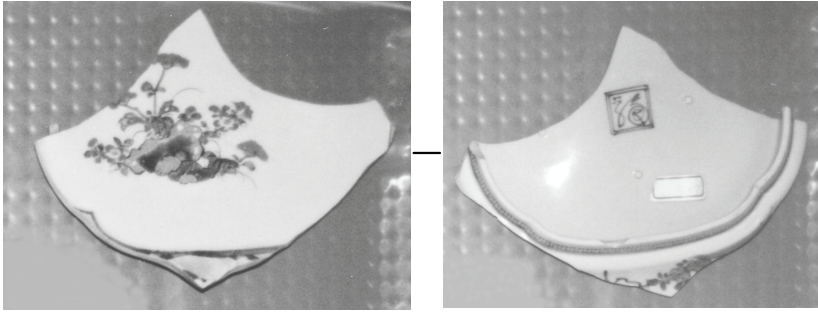


Fig. 11-1 色絵岩女郎花文木瓜形皿（柿右衛門窯3次調査物原遺物取上げ3層出土）

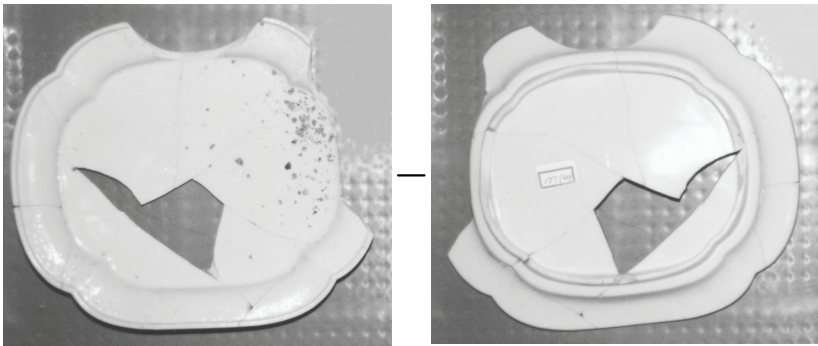


Fig. 11-2 白磁木瓜形皿（柿右衛門窯3次調査物原遺物取上げ3層出土）

層で、色絵岩女郎花文木瓜形皿が出土している (Fig. 11-1)。この皿は内面の区画、内側面の文様、外側面の岩花文、高台外側の櫛歯文、高台内銘の渦「福」銘は、染付による施文である。そして内底の岩女郎花文は、いわゆる「柿右衛門様式」の上絵の基本的な法則で施文されている。いっぽう同じ層では、同型を用いた無文の白磁木瓜形皿 (Fig. 11-2) もみられることから、上絵付けのみの製品も作られた可能性がある。

つまりこの2つは同種の絵付けがされる場合、「典型的な柿右衛門様式」の判断基準の内、乳白手素地 (染付文様の有無) であるかという点以外に違いはみられない。しかし染付の有無によって、同時期に同場所で生産された同類

の製品について、典型製品とそうでない「柿右衛門様式」の製品が分類されることになるため、それを分類することに意味を見出せず、矛盾を生むことになるのである。実際には乳白手の白磁製品、乳白手の白磁に上絵付けをする色絵製品、染付製品、染付の素地上絵付けをする同種の製品が、同じ窯場の中で同じ時代に存在し、生産されていたのである。

## 5. 南川原で培われた高級製品の技術

「柿右衛門」というスタイルは、その枠組みの限定が難しいことを示した。これは外見を重視した分類に傾倒したためである。しかしここで重要となってくるのは、「柿右衛門」というスタイルが、南川原で完成した背景を探ることではないかと考える。窯の製品を考察する場合、限定されたスタイルのみが確認される訳ではないため、その製品に使われている生産技術の理解が論点となってくる。先に挙げられている分類基準となっている技法に加え、高級品として認識されているいわゆる「柿右衛門」の技術の共通点は何であろうか。

窯跡の資料をみていくと、柿右衛門窯と南川原窯ノ辻窯で出土する上質製品には、高い水準で同品質を保つための様々な工夫をみることができる。これは複数の同じ製品について一定の水準で仕上げることで、同じ場所からの揃い、組物の注文にも対応できるようにした結果である。製品としての同じ仕上げを求めた場合、基準となるのは形、見た目が重要であり、それぞれが成形、施文の技術の洗練に繋がっていったと考えられる。

成形時の工夫をみると、ロクロ成形の後に一手間加える型打ち成形がある。型打ちでは型を用いた施文まで行なわれ、複数製品の装飾を同質<sup>(注8)</sup>に仕上げることができる。また、型打ちをすることで高台付近を叩き締めるため、焼き割れも少なくなる<sup>(注9)</sup>という。特に17世紀後半以降の南川原では、主製品が上質皿に変化すると共に顕著にみられる工夫であり、近代までその技術は継続している。

いっぽうで筆を用いた施文時の工夫をみると、染付製品では文様の輪郭線に太線から細線への変化がみられる(Fig. 12-1・2)。理由として文様の筆致が

同じようにみえるようにするため、不安定な太線より細線が選ばれたのである。細線と共に文様の種類に合わせた輪郭線の線種の使い分けや、中を塗る濃みに段階的な色調を用いるなど、表現の選択枝も増加させていることが解る (Fig. 12-3)。

また組物の輪郭線を整える工夫として、仲立ち紙 (Fig. 13) の使用がある。仲立ち紙は線描き (輪郭線) の文様を写すのに使われるが、この使用については南川原地区では、南川原窯ノ辻窯と柿右衛門窯の製品の中で指摘されている。特に柿右衛門窯では

文様の割付に止まらず、鍋島藩窯と共に線描きの下書きとして用いられた可能性が指摘されている (山本文子2010. p. 36-37)。鍋島藩窯と柿右衛門窯は、いわゆる藩の御用品を製作していた窯であり、仲立ち紙の技術は、線描きおよび文様の配置も含めた厳密な注文に忠実に答える製品を作るため、発達した技術の1つであると位置づけられよう。<sup>(註10)</sup>

そしてこのような高水準の中で同品質を保つための新しい技術開発の試み



Fig. 12-1 染付鮎文輪花皿 (南川原窯ノ辻窯物原 C11 層出土)



Fig. 12-2 染付松原文皿 (南川原窯ノ辻窯物原 B4 層出土)



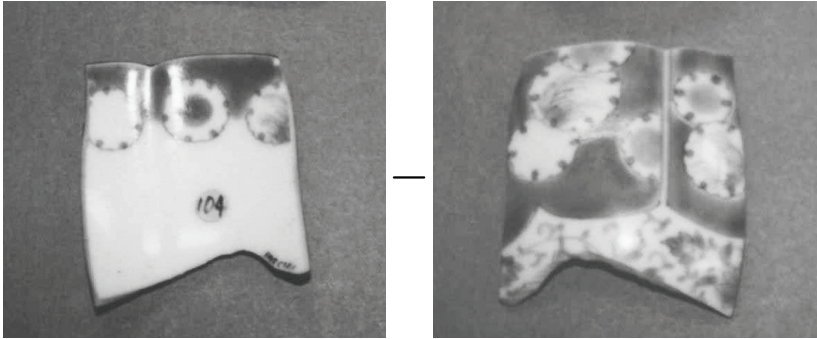
Fig. 12-3 染付桐梅鷺文皿  
(南川原窯ノ辻窯物原 B11 層出土)



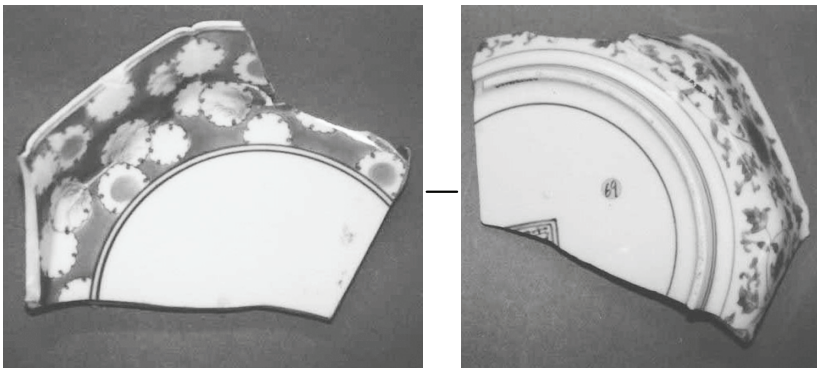
Fig. 13 仲立ち紙(手前)と型打ちの際の土型(奥)  
(昭和時代前半)

が、南川原地区では17世紀後半の海外輸出時代の製品の中にみられ、その一部は「柿右衛門様式」として現在認識されている。さらに類似した文様構成の製品は、有田の中核的な窯場である内山地区でも併行して作られている。これは南川原地区の製品が、品質において有田磁器の規範的な役割も果たしたため、時代を象徴する形で広く作られたのである。

ではこれらの製品は、どのように受容されているのであろうか。江戸加賀藩邸の御殿空間で使用されたことが推測されている東京大学構内遺跡附属病院病棟地点 C2層出土陶磁器<sup>(註11)</sup>については(堀内秀樹 2005. p. 546)、次のような傾向がみられる。この層では、南川原産と考えられる陶磁器がまとまって確認できるが、特に複数器種にわたって雪輪文+牡丹唐草文という内外面文様の組み合わせ、高台内銘が一致する例がみられた(Fig. 14)。高台内銘は、南川原特有とされている例である。これらは7寸以下の器種であり、大型品の中には確認できないことが特徴である。おそらく膳のうえで、同時にセットで使用できる大きさの製品群と推測される。この製品は一括で注文されたと共に、同じ窯内で生産された商品が一括で需要されている様子が反映され



【輪花猪口】



【八角皿】

Fig. 14 東京大学構内遺跡附属病院病棟地点 C2 層出土陶磁器（雪輪文+牡丹文）

ている。「揃いの器」という概念を考えた時に、同形の製品の数量が揃っているということの他に、同じ柄の製品について様々な器種をセットで揃えて使っていたということが挙げられる(高島裕之 2010, p. 85)。施文技術の進歩によって、その双方に南川原の生産技術が対応していると考えられる。

これは海外における製品の受容の中でも該当すると思われる。九州産業大学のヨーロッパの調査記録をみると次のようなことが解る。報告書の中で大橋康二氏によって「南川原山」と明記された資料が 40 点を越えるのは、イギリス・シャーボーン城、ドイツ・ドレスデン州立美術コレクション・ツヴィンガー陶磁器コレクションである。その中で色絵と染付の割合をみると、前

者が45点のうち31点、後者が43点のうち16点が染付<sup>(注12)</sup>である。特にシャーボーン城の伝世品にはナイフやフォークの使用痕が確認でき(柿右衛門様式磁器調査委員会 2009, p. 169)、テーブルウェアとしての使用も考えられる<sup>(注13)</sup>。このことは輸出用とされ、その価格も高価であった色絵磁器と共に、良質の染付製品が海外に少なからず受容されていることが推測できる<sup>(注14)</sup>。

1659年に本格的にはじまるオランダ東インド会社によるヨーロッパ輸出では、中国磁器を見本とし有田に作らせるものと、有田が国内向けに作っている製品から選択して買い、輸出したものがあったことが想定されている(大橋康二 2009, pp. 12-13)。当時良質の「揃い」製品を焼成し、複数の窯が併行して操業していた南川原地区では、国内外それぞれの受容に対応する体制が整っていたと考えられる。単純に色絵製品は海外用、染付製品は国内用とする向きもあるが、窯跡調査で出土する陶磁器の主体は染付磁器であり、その出土量から考えて、南川原地区で製作されたいわゆる「柿右衛門様式」の染付製品は、国内外の双方に向けて対応可能な製品であるといえると思う。

## 6. 小結

最後に本稿で述べてきたことについてまとめると、次の通りである。

①いわゆる「柿右衛門」を焼成した南川原地区で、17世紀後半に操業していた窯跡は、南川原窯ノ辻窯、平床窯、柿右衛門窯、ムクロ谷窯、樋口窯がある。南川原窯ノ辻窯、柿右衛門窯の物原出土陶磁器の変遷をたどると、併行した操業期の中で共通する変化がみられる。双方の窯に同種、同品質の製品もみられることから、陶工同士の交流も考えられる。1つの推測として、同時に操業していた窯の双方に、同じ陶工集団が焼成室を所有し、生産を行ない、海外輸出も含めた多大な需要量に答えていた可能性が想定できる。

②色絵、染付製品の中での「柿右衛門様式」の成立からは、高品質製品を製作するための様々な工夫と技術の進展がみられる。それらの製品の一部を括る形で、「柿右衛門」のスタイルの範囲を限定する考えもある。しかし改めて窯場での陶磁器生産の状況を整理すると、成形の際の型打ちや、筆での施文の際の輪郭線の変化は、同品質の製品を厳密な一定の水準に基づいて作ら



めに多用され、洗練されていった技術といえる。そして高度な色絵磁器が完成したいっぽうで、これらの技術が用いられた染付製品は、我が国の消費地では江戸の大名屋敷の御殿空間での供膳具としてみられ、輸出先のヨーロッパではいわゆるテーブルウェアとして確認できる。逆にいうとこの受容先の趣向の中で、いわゆる「柿右衛門様式」の製品が開発されたと考えられる。

付記：今回ヨーロッパの資料については、九州産業大学の調査成果に基づく所が大きく、未だ自己の研究が不十分であるので今後の方向性を示す形とし、後日改めて再考を加えたい。本稿はオランダの美術誌『VORMEN UIT VUUR』の「柿右衛門」特集に蘭文で掲載予定の原稿に補訂を加えた。掲載にあたっては、金田明美氏(ライデン大学)、堀内秀樹氏(東京大学埋蔵文化財調査室)のご指導、ご協力を賜った。なお、資料調査や資料掲載の際に下記の機関、方々にご指導、ご協力を賜った。ご芳名(敬称略)を掲げさせていただき、心より感謝申し上げます。

有田町教育委員会、佐賀県立九州陶磁文化館、駒澤大学考古学研究室、  
駒澤大学禅文化歴史博物館、東京大学埋蔵文化財調査室、今右衛門窯、  
家田淳一、今泉今右衛門、大橋康二、川副麻理子、酒井清治、鈴木由紀夫、野上建紀、  
藤原友子、村上伸之、山本文子

#### <注>

- 1) 大橋康二氏のご教示による。
- 2) 有田の地名で「山」は、登り窯のある斜面と工房のある平地を含む窯場のあった場所を示していて、一般的にいう山を指しているのではない。
- 3) 乳白手の語はいわゆる「柿右衛門」の製品に用いられるが、これと同じ品質の白磁は、「柿右衛門様式」の成立以前の楠木谷窯跡や下南川原山地区の窯と併行して操業する樋口窯跡でもみられる。村上伸之氏は「赤絵」の創始は、上絵付技法自体の創始のことではなく、その中での「赤絵」という種類の上絵付け技法の創始と考えている。また文書にはその開発にあたり苦労した様子が書かれているが、上絵を描く素地作り、白い素地の開発に手間取った可能性を想定している(村上伸之 2008, p. 223)。染付と色絵の白磁釉の使い分けについては、矢部良明氏も中国との関係から指摘している(矢部

良明 1989. pp. 99-102)。

4) 過去に染付網目文碗を構成する曲線の段数から、他の外山地区の製品と異なり、略描となっていない点を指摘した(高島裕之 2009. p. 141-142)。

5) 2つの窯の物原では、堆積の中で型打ち成形を行なう上質皿の内面文様の描法が同じように変化する点や、同層の陶磁器の組成として胎土の白い青磁、乳白手白磁と鉄釉陶器、外側面文様に梅唐草文を用いる染付芙蓉手皿がみられる点などで共通点がある(高島裕之 2009. p. 172)。

6) 中国からの色絵の系譜を考えている矢部良明氏と村上伸之氏では、同じ色絵磁器のスタイルである「古九谷」と「柿右衛門」との関係性の捉え方が異なっている。矢部良明氏は、「柿右衛門様式」は輸出向けの色絵とし、いっぽうそれよりも早く始まった「古九谷様式」の色絵製品は国内向けの製品として、両者が併行して存在するという立場である(矢部良明 2000. p. 87)。いっぽう村上伸之氏は、「古九谷様式」の中にある複数のスタイルから、「柿右衛門様式」と「鍋島様式」が各々誕生したとしている(村上伸之 2008. p. 219)。

7) 技術の洗練の基礎には、中国景德鎮窯瓷器の技法の直接導入があると考えられる。17世紀中頃の南川原の上質皿の高台内を観察すると、景德鎮窯瓷器に一般的にみられる放射状のカンナ削り痕が多く確認できる。

8) 型打ち成形は17世紀前半から存在する技術であるが、この段階には同じ製品を大量に生産するという目的以外に施文も行なわれ、良質に仕上げる要素が加わったと考えられる。

9) 今泉今右衛門氏のご教示による。

10) 永竹威氏は、酒井田柿右衛門家の記録を基に、「柿右衛門様式」の製品の中に傾向として、藩庁などの御用注文体と諸領内の陶商問屋の注文体の2つがあるとしている(永竹威1977. p. 110)。

11) C2層は大聖寺藩邸内の遺構で、天和2(1682)年の火災後、屋敷再建を行なう整地に使用された焼土を主体とする盛土層である。

12) 数のカウントは、図録に掲載されているNO。(NO.は種類ごとに付されている)ごとに行なった。NO.の中での複数個数は含んでおらず、実数ではなく、図録内での種類数を把握した状態といえる。

13) これらの染付製品については同じ年代に同じ窯で製作された一群として位置付け

られ、同年代の清朝青花瓷も大量に使っていることから、同時代の中での収集と考えられている（古橋千明 2009. p. 49）。

14) 価格に関しては山本盤男氏の論考があり、一般的な傾向として、白より絵付けが、小型よりも大型が、また特別な形状のものが高いという（山本盤男 2008. pp. 60-61）。

#### <参考文献>

- 柿右衛門調査委員会 1957 : 『柿右衛門』 金華堂
- 永竹威 1977 : 『陶磁大系 20 柿右衛門』 平凡社
- 有田町教育委員会 1977 : 『柿右衛門窯跡発掘調査概報』
- 西田宏子 1977 : 『日本陶磁全集 24 柿右衛門』 中央公論社
- 有田町教育委員会 1978 : 『柿右衛門窯跡第 2 次発掘調査概報』
- 有田町教育委員会 1979 : 『柿右衛門窯跡第 3 次発掘調査概報』
- 山下朔郎 1983 : 『藍九谷と藍柿右衛門』 創樹社美術出版
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1986 : 『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1987 : 『楠木谷窯・小溝上窯』
- 矢部良明 1989 : 『日本陶磁大系 20 柿右衛門』 平凡社
- 鈴木由紀夫 1990 : 「17 世紀の素焼きと生掛けについて」『古伊万里シリーズ I 盛期伊万里の美』 古伊万里刊行会. pp. 104-105
- 倉田芳郎・千葉基次他 1993 : 『遺物・文献両面から観た近世肥前磁器』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1997 : 『柴田コレクションV-延宝様式の成立と展開-』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1999-1 : 『柿右衛門様式総合調査事業報告書』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1999-2 : 『柿右衛門—その様式の全容』
- 矢部良明 2000 : 『世界をときめかした伊万里焼』 角川書店
- 矢部良明監修 2002 : 『角川日本陶磁大辞典』 角川書店
- 高島裕之・江川真澄・小野田恵・半田素子・山本文子・中山雄市 2005-2009 : 「有田・南川原窯ノ辻窯跡出土の陶磁器」『駒澤考古 30-34』 駒澤大学考古学研究室
- 堀内秀樹 2005 : 「加賀藩・大聖寺江戸屋敷で使用された肥前磁器と「古九谷」」『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』 東京大学埋蔵文化財調査室. pp. 543-549
- 大橋康二 2008 : 「売立目録にみる肥前陶磁」『柿右衛門様式研究—肥前磁器売立目録と

- 出土資料一』九州産業大学. pp. 12-17
- 山本盤男 2008 「17 世紀後半の肥前磁器の輸出価格に関する考察」『九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター論集第 4 号』九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター. pp. 53-61
- 村上伸之 2008 : 「柿右衛門と鍋島—その成立技術の謎に迫る—」『柿右衛門と鍋島』出光美術館. pp. 217-230
- 柿右衛門様式磁器調査委員会 2009 : 『柿右衛門様式磁器調査報告書—欧州篇—』九州産業大学
- 大橋康二 2009 : 「英国とオランダの肥前磁器コレクションの特徴」『同上書』 pp. 11-20
- 古橋千明 2009 : 「後期スチュアート朝英国における肥前磁器コレクション形成について」『同上書』 pp. 35-49
- 高島裕之 2009 : 『有田古窯跡出土陶磁器の研究—17 世紀における有田・南川原山の陶磁器生産の解明』雄松堂出版
- 高島裕之 2010 : 「江戸遺跡出土の有田・南川原産磁器」『江戸遺跡研究会第 23 回大会都市江戸のやきもの〔発表要旨〕』江戸遺跡研究会. pp. 81-92
- 駒澤大学禅文化歴史博物館 2010 : 『窯跡資料にみる有田焼の変遷—有田・南川原窯ノ辻窯跡出土の陶磁器』
- 山本文子 2010 : 「近世肥前磁器絵付技法の研究—肥前磁器絵付技術における仲立ち紙使用の成立過程」『青山史学第 28 号』青山学院大学文学部史学研究室. pp. 31-48

#### <挿図出典・所蔵・保管先>

- Fig. 1 国土地理院 5 万分の 1 地形図「伊万里」を基に作成
- Fig. 2・7-1・10 佐賀県立九州陶磁文化館所蔵／筆者撮影
- Fig. 3-1 筆者撮影
- Fig. 3-2 倉田芳郎・千葉基次他 1993. PL. 4 より
- Fig. 4・5-1・8-2・8-4・9-1・12 駒澤大学考古学研究室保管／筆者撮影
- Fig. 5-2・6・7-2・8-1・8-3・9-2・11 有田町教育委員会所蔵／筆者撮影
- Fig. 13 今右衛門窯所蔵／筆者撮影
- Fig. 14 東京大学埋蔵文化財調査室保管／筆者撮影